

## 音を仮名でどうか書くか — 『落葉集』と『節用集』 —

今野真二

### Kana Representations of Sound in the Muromachi Period *Rakuyōshū* and *Setsuyōshū*

Shinji KONNO

Tadao Doi, scholar of the Japanese language and specialist of Christian material printed in premodern Japan, has argued that the kanji dictionary *Rakuyōshū* (published in 1598 by the *Societas Iesu* as a Japanese language reference work) utilized a system of kana spelling based on contemporary pronunciations in its representation of Japanese-based readings of kanji (*join*) (1934). I first argue that it is difficult to assess whether or not said kana usage indeed represents Japanese-based readings of kanji (*jion*) in the *Rakuyōshū*. Building on this point, I then examine examples of kana representations of, for example, the sounds *yū* and *shō*, arguing that it is internally consistent while breaking precedent with kana usage used to represent the same sounds in the early Muromachi Period *Wagokuhen* and other texts. The *Rakuyōshū* was a text that would serve as a sample book of sorts for kanji when the *Societas Iesu* would print Japanese-language texts; the phonetic readings appended to kanji (*furigana*) became search keys for looking up those characters. For this reason, then, it became more important to maintain an internal consistency of phonetic representation than adhering to precedent. The characterization of sound (*oto*) in the *Rakuyōshū* should be viewed and evaluated from this perspective. In this study I also compare the way sound is represented in the older *Setsuyōshū*. This comparison reveals a different pattern in the *Setsuyōshū*: on occasion a single kanji will have headings and entries in two different sections (*sōkei*) of the text with the tendency for the text to recognize two different – and thus inconsistent –

written forms.

## 要 旨

1598年に日本イエズス会によって出版された『落葉集』について、土井忠生(1934)は「落葉集本篇及び色葉字集に於いて検出する所の字音や国訓に当時の発音的仮名遣を用ゐた」と指摘している。本稿では、『落葉集』においては、「字音」に「発音的仮名遣」が使われているとは認めにくいということをまず指摘した。その上で、[ユー][ショー]を具体的に話題とし、『和玉篇』などで踏襲されてきている「字音仮名遣い」とは異なる書き方に統一されていることを指摘した。『落葉集』は日本イエズス会が日本語のテキストを印刷するにあたって使うことができる漢字活字の「総見本帳」であり、振仮名は漢字をさがしあてるための「検索キー」であった。したがって、これまでにどう書かれてきたかということよりも、テキスト内で統一されていることが重要であった。『落葉集』における「音」の文字化はそうした観点からとらえ、評価するべきものであると考える。本稿では、古本『節用集』が「音」をどのように文字化しているかということと対照を行なった。その結果、『節用集』は『落葉集』とは異なる「傾向」を示していることがわかった。『節用集』には同じと思われる見出しを二つの部に掲げる「双掲」がみられ、次第に二つの書き方を認めていく方向にあることが窺われた。

〈キーワード〉落葉集・節用集・活字の総見本帳・表音的表記・字音仮名遣い

## はじめに

1598年に日本イエズス会によって出版された『落葉集』(註1)は前篇にあたる「落葉集」「色葉字集」、後篇にあたる「小玉篇」という前後篇、2部構成を成す。あるいは全体が3部構成を成すとみることもしできる。本稿ではテキスト全体を指す場合は『落葉集』、テキストを構成する1部を指す場合は「落葉集」と表示して区別する。

『落葉集』については、豊島正之が「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」(『キリシタンと出版』2013年、勉誠社)において、「一五九八

年のうちに、日本イエズス会は二千五百字を越える漢字活字の新鑄に至り、それらの「総見本帳」として、漢字字書「落葉集」を刊行した(153頁)と述べている。本稿では、この豊島正之の言説を受けて、『落葉集』は、日本イエズス会が日本語テキストを活字印刷するにあたって使うことができた漢字活字の「総見本帳」であったと前提したい。

『落葉集』が漢字活字の「総見本帳」であるならば、「漢字を検索できるテキスト」であることになる。すなわち『落葉集』にとっては、「漢字検索」が重要になる。「落葉集」「色葉字集」においては、漢字の右側に施された振仮名が「検索キー」となっている。「序」の表現を使えば、前者では「字の音聲」すなわち「音」が右側に、「讀」すなわち「訓」が左側に振仮名として置かれている。後者では逆に「訓」が右に、「音」が左に置かれている。「小玉篇」は「文字のかたちを見て其よみこゑをしる」「便として」(小玉篇序)「落葉集」と「色葉字集」とに基づいて編まれている。部首から漢字を検索するようになってきているが、見出しとなっている漢字の右側に「音」が左側に「訓」が振仮名として施されている。本稿では、『落葉集』において、仮名によって「音」がどのように綴られているか、ということをご本『節用集』を対照しながら、考察することを目的としている(註2)。「対照言語学(contrastive linguistics)」においては、言語を対照することを「分析方法」として、分析したい言語(目標言語 target language)についての知見を得るが、本稿の場合、現時点では「目標(target)」は『落葉集』である。ただし、いずれは『節用集』を「目標」として設定したい。

『落葉集』全体としていえば、「音」が出現するのは、「落葉集右振仮名」「色葉字集左振仮名」「小玉篇右振仮名」である。例を示して確認をしておく。以下引用にあたって、2字以上の繰り返し符号には仮名をあてる。

○勝(右せう/左かつ)まさるゝ・すぐるゝ・たゆる 落葉集 59丁表5行目

勝(右すぐるゝ/左せう)かつ・たへたり・まさるゝ・あぐ 色葉字集 22丁表4行目 勝(右せう/左すぐるゝ)かつ・まさるゝ・たへたり 小玉篇 1丁表7行目(月部)

勝(右せう/左まさる)たへたり・すぐるゝ・かつ 小玉篇 11表5行目(力部)

「落葉集」においては、「○」を附してまず単漢字を示し、その単漢字の下に「\*」を附し、当該単漢字を頭字にする熟語を並べる。「右」は右振仮名、「左」は左振仮名を示している。以下この形式で引用を行なう。また「落葉集」「色葉字集」「小玉篇」いずれも、掲出している単漢字の下に訓を示すことがある。これを便宜的に「字下訓」と呼ぶことにする。「字下訓」は右から左に「よみとり」、「・」で区切って並べて示すことにする。

「小玉篇」では「月部」と「力部」に「勝」があげられている。「落葉集右振仮名」「色葉字集左振仮名」「小玉篇右振仮名」にいずれも「せう」と振仮名が施されている。

1: これまでに指摘されていること

土井忠生は「落葉集考」(『國文學攷』第1巻第1輯, 1934年, 後1942年, 靖文社刊『吉利支丹語學の研究』再収, 引用は後者による)において、次のように述べている。漢字字体は通行しているものに改めた。

- 1: (「落葉集」は) 字音による発音引であるからして、字音の発音に就いては可成り厳密に識別してある。すべて、字音仮名遣には拘泥せず、室町末期に於ける発音に基づいてゐるのであつて、長短を分つのは勿論、清濁を明かにして、それ―母字を異にし、濁音符の外に半濁音符を用ゐたのも、当時わが国の辞書では他に例のない所である(22頁)。
- 2: オ段長音の開合の別は京都人の発音では混乱しかけてゐたけれども、標準的発音を尊重した吉利支丹は、羅馬字では開音をō, 合音をoと写し別け、本書に於いても亦この区別を乱してはゐない。例へば、開音の答当湯盜倒踏党刀唐は「たう」、導納堂道は「だう」とし、合音の東灯等關冬洞は「とう」、動銅童僮は「どう」と写してゐる。その中、答納の字音仮名遣は「タフ」「ダフ」であるけれども、長音はすべて「う」を以て示してゐる。さうして、かゝる直音に於いては、開音はア段の仮名、合音はオ段の仮名の下に「う」を添へて示し、拗長音に於いては、開音はイ段の仮名の下に「やう」を添へて字音仮名遣通りに書き、合音は字音仮名遣に拘らないで悉くエ段の仮名の下に「う」を添へて写す。例へば、生商相請掌などは「しやう」、

上浄成城常などは「じやう」とし、小少焼消照肖焦樵招の「セウ」は勿論のこと、勝證鍾松称升訟衝承の「シヨウ」も一緒にして「せう」とし、乗の「ジヨウ」も焼照の「ゼウ」と同じく「ぜう」と書いてゐる（23～24頁）。

- 3：発音に基づいたかゝる仮名の用法（引用者補：ワと発音する箇所に「ハ」をあてる仮名文字遣のこと）も、母字に於いては厳密であるけれども、それ以外の場合には字音仮名遣や歴史的仮名遣をそのまま、残したものが少くない。整理統一が徹底してゐるとは言へない。母字に於いても、（略）「ゆ」と「い」との両方に挙げた例さへある。勇は元来「ゆう」であるが、伊呂波字類抄十卷本にも「勇堪」を伊の部に出してゐるので、落葉集も拠つた資料を未整理のままに取入れたのであるかも知れない。「イウ」の字音を有する遊幽有誘などを、伊呂波字類抄や節用集では伊の部にも由の部にも収めてゐるが、落葉集では「ゆ」の部にだけ載せてゐる（24～25頁）。
- 4：また落葉集本篇（引用者補：本稿でいう「落葉集」のこと）及び色葉字集に於いて検出する所の字音や国訓に当時の発音的仮名遣を用ゐたこと、小玉篇に於いて字部の分類索引を附したこと、所属字部の決定し難い漢字は二三の字部の下に挙げ、字部構成の判明し難い漢字は行草体で類似した字部の中に収めたことなどは、すべて本書の利用を容易ならしめるが為の考案である（51頁）。

まず本稿における「用語」について定義し、整理しておきたい。「仮名使い」は「仮名の使い方」を指す。したがって、その書き方に実績や蓄積があるかどうかは問わない。右の1～3には「字音仮名遣」とある。『日本語学大辞典』（2018年、東京堂出版）の見出し「字音仮名遣い」には「古代語については「歴史的仮名遣い」が適用される。この歴史的仮名遣いは、広義には和訓と字音とを含むが、狭義には和訓の仮名遣いを指し、字音の歴史的仮名遣いを特に「字音仮名遣い」と呼ぶ」「現行の諸辞典類が採用している字音仮名遣いの基本的な部分は、やはり江戸時代の本居宣長が提唱した所を継承している」（457頁左：沼本克明執筆）と記されている。「歴史的仮名遣いは、広義には和訓と字音とを含む」は「仮名遣い」に「和訓と字音と」が含まれると述べており、「仮名遣い」「和訓」「字音」の概念

からすれば、きわめて不正確な表現にみえる。それについては措く。土井忠生(1934)の「字音仮名遣」は、宣長が提唱したものを「基本的な部分」とする「字音仮名遣い」とみてよいと思われる。

1には「落葉集」においては「すべて、字音仮名遣には拘泥せず、室町末期に於ける発音に基いてゐる」と述べられ、4では、「落葉集」「色葉字集」において、「検出する所の字音や国訓に当時の発音的仮名遣を用ゐた」と記されている。これらの言説は「仮名遣」「発音(的)」ということにかかわって、理解しにくい。例を使って説明する。

○良(右りやう／左まさに)やゝ・よし - 辰(右しん／左とき) -  
将(右しやう／左まさに)(以下略)(落葉集12丁裏3～4行目)

右では「良」字に「りやう」と右振仮名が施されている。これは単漢字「良」についての記事で、「良」を頭字とする熟語、「良辰」「良将」が続いて掲出され、熟語の下字「辰」「将」にはそれぞれ左右に振仮名を施されている。これは熟語「リョウシン(良辰)」「リョウショウ(良将)」の下字に施されたもの、とひとまずはみておきたい。『日葡辞書』には「Rioxin」「Rioxo」(3つのoはすべてキャロン付き)というかたちで見出しがたてられている。ここから推測される「リョウシン」「リョウショウ」の当時の発音は[リョーシン][リョーショー]である(註3)。

「りやうしん」「りやうしやう」が[リヤウシン][リヤウシヤウ]という発音をあらわしているのではなく、[リョーシン][リョーショー]という発音をあらわしているとみた時、「室町末期に於ける発音に基づいてゐる」あるいは「当時の発音的仮名遣」の「発音」は理解しにくくなる。[リョーシン][リョーショー]と発音している語を「りやうしん」「りやうしやう」と仮名で綴る、その仮名の使い方を「当時の発音的仮名遣」と名づけているということであろうか。しかしそれでは「発音的」が意味をなさない。土井忠生(1934)の「発音」は、その概念、表現の適切さという点において疑問をもたざるをえない。

本稿においては「表音的」という概念、表現を使うことにする。右の例でいえば、[リョーシン][リョーショー]と発音している語であれば、その発音を想起しやすい「仮名の使い方」をするのが「表音的仮名使い」「表

音的な文字化」である。仮名に限らず、文字による表音には限度があり、徹底はしないので、「表音的」という表現を使う。「表音的仮名使い」「表音的な文字化」を一方においた場合、そうではない「非表音的仮名使い」「非表音的な文字化」という概念、表現が設定できる。「表音的仮名使い・表音的な文字化／非表音的仮名使い・非表音的な文字化」は相対的なものとなることはいうまでもないので、話題にしていることがらごとに、考えていくことになる。

### 1 [ユー] の仮名使い

土井忠生(1934)は「字音仮名遣い」が「ゆう」であると考えられている。「勇」に「ゆう」「いう」の振仮名が施され、「い部」「ゆ部」に重複して掲げられていることを指摘し、加えて「字音仮名遣い」が「いう」であると考えられている「遊幽有誘など」を「ゆ部」に収めていることを指摘している。まず [ユー] の仮名使いについて検討してみたい。

○勇 (右いう／左すくやか) いさむ・けなげ	落葉集 2 丁裏 6 行目
○勇 (右ゆう／左いさむ) けなげ・すくやか	落葉集 44 丁裏 7 行目
勇 (右いさむ／左ゆう) けなげ	色葉字集 1 丁表 3 行目
勇 (右ゆう／左いさむ) けなげ・こひねがはく	小玉篇 11 丁表 6 行目
遥 (右はるかなり／左いう) とをし	色葉字集 2 丁裏 3 行目
遥 (右よう／左はるかなり) よりより・とをし	小玉篇 15 丁裏 5 行目
佑 (右いふ／左たすく)	小玉篇 2 丁表 2 行目

『落葉集』は右振仮名を「検索キー」として漢字にたどりつくようになっているので、その『落葉集』において「いう」からも「ゆう」からも「勇」が検索できるようになっていることには注目したい。

「遥」の「字音仮名遣い」は「エウ」と考えられているが、「色葉字集左振仮名」は「いう」, 「小玉篇右振仮名」は「よう」となっており、振仮名が揺れている。『落葉集』全体で振仮名「えう」が施されているのは、「葉 (右は／左えう)」(色葉字集 2 丁表 8 行目), 「葉 (右えう／左は)」(小玉篇 6 丁表 5 行目: 木偏), 「葉 (右えう／左は)」(小玉篇 13 丁表 8 行目: 草冠) の 3 箇所のみである。「字音仮名遣い」が「エウ」と考えられてい

る「夭・妖・要・腰・幼」,「字音仮名遣い」が「ヨウ」と考えられている「用・庸・雍・鷹・容」にはいずれも振仮名「よう」が施されている。「字音仮名遣い」「エウ」「ヨウ」は当該時期には「ヨー」と発音されていたと思われ,「開音／合音」ということでいえば合音であるので,土井忠生(1934)が指摘した「直音に於いては,開音はア段の仮名,合音はオ段の仮名の下に「う」を添へて示す」という書き方に合致している。また「佑」の「字音仮名遣い」は「ユウ」と考えられているが,「小玉篇右振仮名」は「いふ」となっている。

次に,「字音仮名遣い」が「イウ」と考えられている「又・友・宥・鮪・游・遊・祐・尤・幽・雄・酉・猶・熊・愈・誘」について整理してみる。

○遊(右ゆう／左あそぶ)	落葉集 44 丁裏 3 行目
○幽(右ゆう／左かすかなり)	落葉集 44 丁裏 4 行目
○有(右ゆう／左あり) たもつ	落葉集 44 丁裏 5 行目
○雄(右ゆう／左おんどり) かつ	落葉集 44 丁裏 6 行目
○宥(右ゆう／左なたむ)	落葉集 44 丁裏 6 行目
○右(右ゆう／左みぎ)	落葉集 44 丁裏 7 行目
○誘(右ゆう／左さそふ) いざなふ	落葉集 44 丁裏 7 行目
○游(右ゆう／左をよぐ)	落葉集 44 丁裏 7 行目
○猶(右ゆう／左なを)	落葉集 44 丁裏 8 行目
又(右また／左ゆう)	色葉字集 13 丁裏 1 行目
又(右ゆう／左また)	小玉篇 17 丁表 3 行目
友(右とも／左ゆう)	色葉字集 4 丁表 2 行目
友(右ゆう／左とも)	小玉篇 16 丁裏 3 行目
宥(右なだむる／左ゆう) ゆるす	色葉字集 10 丁表 1 行目
宥(右ゆう／左なだむ) ゆるす・さだむ・おもんばかり	小玉篇 12 丁表 5 行目
鮪(右ゆう／左しび)	小玉篇 9 丁表 4 行目
游(右をよぐ／左ゆう) うかぶ・あそぶ	色葉字集 4 丁裏 5 行目
游(右ゆう／左あそぶ) うかぶ・をよぐ	小玉篇 5 丁裏 1 行目



游（右あそぶ／左ゆう）およぐ	色葉字集 16 丁表 1 行目
遊（右あそぶ／左ゆうふ）	色葉字集 16 丁表 1 行目
遊（右ゆう／左あそぶ）うかる・をどる	小玉篇 15 丁裏 3 行目
祐（右ゆう／左さいはい）たすく	小玉篇 10 丁表 5 行目
尤（右もつとも／左ゆう）とも・あやまち・とがむ	色葉字集 21 丁裏 3 行目
尤（右ゆう／左もつとも）はなはだ・めづらし・とがむ	小玉篇 14 丁裏 8 行目
幽（右かすか／左ゆう）	色葉字集 6 丁裏 4 行目
幽（右ゆう／左かすかなり）とをし・くらし	小玉篇 12 丁裏 5 行目
雄（右をんどり／左ゆう）かつ	色葉字集 5 丁表 6 行目
酉（右とり／左ゆう）	色葉字集 4 丁表 1 行目
酉（右ゆう／左とり）	小玉篇 19 丁裏 3 行目
猶（右なを／左ゆう）べし・ごとし	色葉字集 10 丁表 3 行目
猶（右ゆう／左なを）なをし・べし・いつはり	小玉篇 8 丁表 6 行目
熊（右ゆう／左くま）	小玉篇 5 丁裏 3 行目
愈（右ゆう／左いゆる）まさる・かしこし・いよいよ	小玉篇 3 三丁裏 3 行目
誘（右こしらゆる／左ゆう）さそふ	色葉字集 15 丁表 2 行目
誘（右さそう／左ゆう）す・む・こしらゆる	色葉字集 17 丁表 3 行目
誘（右ゆう／左さそう）すむ・こしらゆる	小玉篇 3 丁表 6 行目

先に指摘したように、『落葉集』全体において「いう」は2回しかみられない。「勇」に関していえば、振仮名「いう」から検索できるようになっている一方で、振仮名「ゆう」からも検索できるようになっている。これを編集上の錯誤に基づく「不統一」と（何らの検証なく、いわば常識的に）みなすことはできる。しかし、これを「有意の現象」とみれば、見出しの双掲は、発音 [ユー] と文字化のしかたとの「なんらかの懸隔」を補う「手当」であるとみなすこともできる。そのようにみなし得る箇所には2回しかみられない「いう」が現れている。

また、「遥」の「字音仮名遣い」は「エウ」と考えられているが、「小玉篇」においては右振仮名「よう」が施されている。「よう」は、土井忠生

(1934) が指摘しているように、『落葉集』においては、合音に対しては、オ段の仮名+「う」のかたちで振仮名を施すという原則に一致している。したがって、色葉字集の左振仮名として施されている「いう」には疑問が残る。「小玉篇」人偏の部の最後に置かれた「佑」字に右振仮名として「いふ」が施されている。「佑」の「字音仮名遣い」は「イウ」と考えられている。この「いふ」を含めても「いう／いふ」は『落葉集』全体において3回しかみられない。

『日葡辞書』には「Yuqi」(勇氣)、「Yuguio」(遊魚)、「Yuyei」(游泳)、「Yuin」(誘引)(いずれも u には長音を示すキャロンが付いている)という綴りで見出しがたてられているのであって、それぞれの漢字の「音」の発音が「イウ」[ユウ]ではなく、[ユー]であったことが窺われる(註4)。はっきりと「ユー」と発音しているとすれば、その発音は「いう」よりも「ゆう」と結びつきやすいことはいえよう。仮名書き語形「ゆう」のほうが「いう」よりも「ユー」という発音を想起させやすいといってもよい。稿者は、発音が「ユー」であるならば、「いう」よりも「ゆう」が表音的であるとみなす。

漢字の「音」を仮名によって文字化する、あるいは漢語を仮名によって文字化する、ということが室町期に先立つ時期、室町期において、広く行なわれていたとは考えにくい。つまり、仮名書き語形によって漢字や漢語を同定するという「経験」は蓄積されていなかった、とまずは前提したい。そうであれば、例えば『落葉集』の右振仮名に、「これまでの文字化」とは異なる形の振仮名を施すことは、それが徹底していれば何ら支障のないことになる。

まずは『落葉集』という印刷された一つのテキストがどのようになっているか。『落葉集』が日本イエズス会が印刷出版しようとしている日本語テキストに使う漢字活字の「総見本帳」であるならば、いわゆる「キリシタン版」がどのようになっているか。そして次には、『落葉集』、「キリシタン版」が当該時期の、日本語母語話者によるテキストとどのように重なり合うのか、というように、観察の枠組みは次第に大きくなり、それぞれの観察、考察には、それを支える「根拠データ」が必要になる。

ここまで述べてきたことがらに関して、『落葉集』とちかい時期に成立したと覚しい文献として、『音訓篇立』を採りあげておく。『音訓篇立』は

東洋文庫に蔵されている、世尊寺本『字鏡』や、室町期に写され、出版されるようになっていく『和玉篇』とかかわりの深いテキストと目されている。その『音訓篇立』において、「游・尤・雄・酉・猶・熊・誘」について調べてみると、次のように記されている。

游 (ユ音・イウ音) ヲヨク・アソフ・ウカフ 天上・46丁表2行目  
 熊 (イウ音) クマ・ワサ 天上・34丁裏6行目  
 酉 (シウ音・ユ音・イウ音・戈音) ツク・アク・クスリ・トリ天中・  
 33丁裏2行目  
 雄 (イウ音・ヲウ音) ヲトリ・タケシ・ヲキキナリ・ヲホキニ・カツ・  
 ヲトコ 天中・37丁表3行目  
 誘 (イウ音・ユ音) コシラフ・ヲサム・ツ、メク・アサム・ヤトノ・ヲ  
 シフ・アラハス・ノノム・クル・ミチヒク・アサムク・ワカツ・ス、  
 ム・ヤトフ・ヲホス・ホサル・ウカ、フ・ヒクコト・ヤトフ 地上・  
 13丁裏2行目  
 尤 (イウ音・ウ音) ケヤシ・モトム・スクレタリ・スクール・ア□□チ・  
 タカフ・イヤラシ・トカム・ハ□□シ・セム・イフナリ 地下第6・  
 34丁裏5行目  
 猶 (イウ音・ユ音) ナヲシ・コトシ・ヨルナリ 人下第8・20丁表4行  
 目

例えば、世尊寺本『字鏡』において「猶」字は次のように記されている。

猶 イウ音 ユ音 以周反  
 ナヲシ・コトシ・ヨルナリ  
 若也 如也 道也 劣也 尚也 又獸也 者也 者也  
 如鹿善登木一曰隴西謂犬子猶 (第2冊 74丁裏4行目)

右の『字鏡』の語釈内には漢文注がみられる。『爾雅』には「如B善登木」(Bは鹿+几)とあり「鹿」ではないが、書承の間に書きひがめられたものとみるのが自然であろう。また『説文解字』には「一曰隴西謂犬子猷」とあり、この記事も(直接かどうかは措くとして)『説文解字』に由来す

るものと思われる。漢文注に「者也」が重複しているなど、何らかの「錯誤」は含まれていると思われるが、反切も備えており、世尊寺本『字鏡』が中国の辞書の「情報」を受け継いでいることは明らかといえよう。『音訓篇立』の「イウ音・ユ音」「ナラシ・コトシ・ヨルナリ」はそのまま世尊寺本『字鏡』にみえており、やはり両テキストの系譜的な関連を窺わせる。「猶」字に附された「イウ音・ユ音」という仮名書き音形はそうした「流れ」の中にある。『落葉集』が、「イウ」ではなく「ゆう」を仮名書き音形として選んだということは、『落葉集』の「選択」といえよう。『音訓篇立』の記述は、中国語規範寄りの「文字社会」の在り方の確認とみなし得るが、次には必ずしもそうではないことが予想される「文字社会」の在り方の確認をするために、古本『節用集』の記事を確認する。具体的には、「伊勢本」系統に属するテキストとして（一般には「天正18年本」と呼ばれている）「堺本」と、「印度本」系統に属するテキストとして「黒本本」「南葵文庫本」とを使うことにする。引用に際して語釈は省く。同じ（と思われる）見出しが二つの部に重複して掲出される「双掲」には◎を附した。

## [堺本い部]

- |            |       |
|------------|-------|
| ◎幽霊（右イウレイ） | 人倫門   |
| ◎有道（右イウタウ） | 言語進退門 |

## [堺本ゆ部]

- |            |       |
|------------|-------|
| 猶子（右ユウシ）   | 人倫門   |
| 右族（右ユウシヨク） | 人倫門   |
| ◎幽霊（右ユウレイ） | 人倫門   |
| 猶豫（右ユヨ）    | 畜類門   |
| 由緒（ユイシヨ）   | 言語進退門 |
| ◎有道（右ユウタウ） | 言語進退門 |
| 幽言（右ユウゲン）  | 言語進退門 |
| 宥免（右ユウメン）  | 言語進退門 |
| 誘引（右ユウイン）  | 言語進退門 |
| 遊覧（右ユウラン）  | 言語進退門 |
| 遊宴（ユウエン）   | 言語進退門 |
| 悠々（右ユウユウ）  | 言語進退門 |

勇健 (右ユゴン)	言語進退門
優 (右ユウナル)	言語進退門
[黒本本い部]	
幽霊 (右イウレイ)	人倫門
[黒本本ゆ部]	
猶子 (右ユウシ)	人倫門
有道 (右ユウタウ)	言語進退門
宥免 (右ユウメン)	言語進退門
遊覧 (右ユフラン)	言語進退門
遊宴 (右ユウエン)	言語進退門
悠々 (右ユフユフ)	言語進退門
誘引 (右ユフイン)	言語進退門
右筆 (右ユフヒツ)	言語進退門
猶豫 (右ユヨ)	言語進退門
[南葵文庫本い部]	
幽霊 (右イウレイ)	人倫門
右動 (右イフドウ)	言語数量門
幽閑 (イウカン)	言語数量門
◎有職 (右イウシヨク)	言語数量門
優美 (右イウヒ)	言語数量門
邑老 (右イウラウ)	言語数量門
雄飛 (右イウヒ)	言語数量門
友交 (右イウカウ)	言語数量門
◎悠々 (右イウイウ)	言語数量門
幼若 (右ヨウジヤク)	言語数量門
[南葵文庫本ゆ部]	
猶子 (右ユウシ)	人倫門
猶豫 (右ユウヨ)	畜類門
△訝 (右ユブカル)	言語進退門
勇健 (右ユゴン)	言語進退門

有道 (右ユウタウ)	言語進退門
宥免 (右ユウメン)	言語進退門
幽玄 (右ユウケン)	言語進退門
◎悠々 (右ユウユウ)	言語進退門
誘引 (右ユウイン)	言語進退門
右筆 (右ユウヒツ)	言語進退門
◎有職 (右ユウシヨク)	言語進退門

「塚本」「黒本本」に関していえば、まずは「ユウ (ユフ)」が優勢といえよう。この「優勢」は「量的観点」からの評価といってよい。そうであっても、「塚本」においては、「幽霊」「有道」が「い部」と「ゆ部」とに双掲されている。「南葵文庫本」においては、「有職」と「悠々」とが双掲され、単字を単位としてみれば、「幽」「右」を頭字とする見出しが「い部」「ゆ部」両部にある。こうしたことからすれば、文字化のしかたは揺れていたとみるのが自然で、これを「質的観点」からの評価ととらえたい。「字音仮名遣い」が「イウ」である単漢字の「音」を仮名書きしようとした場合、中国語規範寄りの文献では「イウ」と書いていたと思われるが、「中国語規範」から離れた文献、すなわち古本『節用集』のような文献では、「イウ」「ユウ」いずれを書くかということで揺れていたが、どちらかといえば「ユウ (ユフ)」が優勢であった。「揺れている」ことからすれば、配列をもつ辞書体資料が「い部」「ゆ部」に双掲するという事は一つの「手当」といえよう。しかしまた、揺れているのであれば、思いきっていずれかの書き方に統一するという事も一つの「手当」といえよう。古本『節用集』は辞書体資料とはいっても、テキスト全体を統一するような、意図的、意識的な編集が行なわれたとはいえない。まったく編集が行なわれていないわけではないが、書写行為の中で、次第にテキストとしての形を整えていった、というみかたが妥当であろう。そこに『落葉集』と古本『節用集』との大きな違いがある。当該時期の日本語を観察するテキストとして『落葉集』を使うのであれば、意図的、意識的に「統一」を目指した文献という枠組みの中で、それがいかに実現し、いかに実現していないか、ということを通して当該時期の日本語を考えるべきであろう。また古本『節用集』を使うのであれば、言語の自然な「揺れ」をまずは観察するテキストとし

て使うのがふさわしいと考える。そうしたことをふまえずに、『落葉集』と古本『節用集』をいわば「機械的に」対照したとしても、当該時期の日本語について得られる知見はほとんどないと考える。

### 3 拗長音の仮名使い

『落葉集』は土井忠生（1934）が指摘しているように、拗長音を次のように文字化している。

開音……イ段の仮名+やう = 字音仮名遣いの通り

合音……エ段の仮名+う = 字音仮名遣いの「セウ」+「シヨウ」

- 将（右しやう／左まさに）\* - 軍（右ぐん／左いくさ）（落葉集 49 丁表 6～7 行目）
- 小（右せう／左ちひさし）しばらく・すこし - 過（右くは／左あやまり）（落葉集 59 丁表 1 行目）
- 證（右せう／左しるし）かなふ - 抛（右こ／左よる）（落葉集 59 丁表 6 行目）

「将」の「字音仮名遣い」は「シヤウ」,「小」の「字音仮名遣い」は「セウ」,「證」の「字音仮名遣い」は「シヨウ」で,「将」には「しやう」,「小・證」には「せう」が振仮名として施されている。当該時期に発音 [ショー] が、例えば [ショー開音] [ショー合音] のように二つある、とみなさないのであれば、一つの発音 [ショー] に対応する「字音仮名遣い」は「シヤウ」「シヨウ」「セウ」「セフ」の四通りが考えられる。「二つの発音とみなす」ということと「かつてどのように書かれていたかを重視する」ということは異なる。前者は、「発音をどうとらえるか」ということで、「どうとらえるか」も「音声としてどうとらえるか」と「音韻としてどうとらえるか」とにわかれるが、ここではそこに論点があるのではないので、「二つの発音とみなす」という表現を使うことにする。「二つの発音とみな」しているのも、仮名による文字化のしかたも二つにわけるということはもちろん合理的なことといえよう。また、「かつてどのように書かれていたかを重視する」場合は、「かつてどのように書かれていたか」をどのよう

にいわば「データとして持つか」についても考え、あるいは推測しておく必要があるが、「かつてどのように書かれていたか」は『落葉集』の編纂者には漠然としたかたちであってもわかっていた、と仮定しておくことにする。そうであれば、『落葉集』編纂者は、いわゆる「開合」の区別を重視した、「仮名による文字化」を選択しているとみるのが自然であろう。

〔ショー〕という「音」を仮名で文字化する場合、「シヨウ」「セウ」のいずれが表音的であるかといえ、前者が表音的といわざるをえない。仮名文字列「セウ」は頭字が「セ」であるので、〔セ〕という発音を想起させる。その点において「非表音的」といえよう。その「非表音的」な「セウ」にいわば統一したということからすれば、この文字化のしかたについては少なくとも「表音的表記」が優先されているわけではないことになる。そうであれば、「非表音的表記」である「セウ」に統一した理由を考える必要があるが、現時点では稿者にはその答えの用意がない。このことはこれまで話題になったことがないと思われるので、今後の課題として、ここでは問題提起にとどめることにする。

ここまで、「〔ショー〕という「音」を仮名でどのように文字化するか」という問いのもとに論を進めてきた。この問いは「抽象度が高い問い」といってよい。例えば、古本『節用集』を素材にしたとして、「古本『節用集』において、〔ショー〕という「音」をもつすべての漢字にどのような仮名が施してあるか」という問いも同じように「抽象度が高い」。この問いは、当時そうした「抽象度が高い」認識がなされていたか、ということも離れても成立するであろう。その答えを得ることもできる。作業に誤りがなければ、誰がやっても同じ答えが得られる。それは「動かしがたい事実」でもある。

しかし、当該時期の日本語母語話者にはおそらく「〔ショー〕という「音」を（統一的に）仮名で文字化する」という認識はなかったであろう。とすれば、「当該時期の日本語母語話者が使っていた日本語」ということとは切り離された「問い／答え」であることになる。「動かしがたい事実」の指摘で、すべてが終わる可能性もある。

「伊勢本」系統に属するテキスト中でもっとも古態を残していると思われる「正宗文庫本」「し部・せ部」から発音〔ショー〕〔ジョー〕に関わる見出しをあげ、「正宗文庫本」に系譜的にちかいと目されている「大谷大



学本」及び「印度本」系統に属する「小汀本」の振仮名を併せて示す。引用にあたっておおむね語釈は省いた。「正宗文庫本」と一致しない場合には×を附した。当該の見出しがない場合には空欄にした。

[正宗文庫本し部]	[大谷大学本し部]	[小汀本し部]
清涼殿 (右シヤウリヤウデン)		×セヤウリヤウテン
庄 (右シヤウ) 村也	シヤウ	シヤウ
城 (右ジヤウ) 要害	ジヤウ	ジヤウ
小便所 (右シヤウヘンドコロ) 後架		
	×シヨウベンシヨ	×シヨウベンジヨ
修正 (右シユシヤウ) 正月	シユシヤウ	
上元 (右シヤウケン) 正月十五日		
	シヤウケン	ジヤウケン
上巳 (右シヤウシ) 三月三日		
	シヤウシ	ジヤウシ
時正 (右ジシヤウ) 二八月ノママ被岸		
	シシヤウ	ジシヤウ
小春 (右シヤウシユン)	×シヨウシユン	×シヨウシユン
上澣 (右ジヤウカン)	シヤウクハン	ジヤウカン
菖蒲 (右シヤウブ)	シヤウブ	シヤウブ
生薑 (右シヤウガ)	シヤウガ	
薔薇 (右シヤウヒ)	シヤウビ	シヤウビ
將軍 (右シヤウゲン)	シヤウゲン	シヤウゲン
聖道 (右シヤウダウ)	シヤウダウ	シヤウダウ
上座 (右ジヤウザ)	ジヤウザ	ジヤウザ
承仕 (右シヤウジ)	×ジヨウシ (承事)	×ジヨウジ (承仕)
上臈 (右ジヤウラウ)	ジヤウラウ	ジヤウラウ
上戸 (右シヤウゴ)	シヤウゴ	
庄官 (右シヤウグワン)	シヤウグワン	
消渴 (右シヤウカツ) 病也	シヤウカツ	
少貳 (右シヤウニ)	×シヨウニ	×シヨウニ
少納言 (右シヤウナゴン)	シヤウナゴン	×シヨウナゴン

将監 (右シヤウケン)	シヤウゲン	シヤウゲン
聖徳太子 (右シヤウトクタイシ)		
	シヤウトクタイシ	シヤウトクタイシ
鍾馗大臣 (右シヤウギダイジン)		
	×シヨウキダイジン	×シヨウキダイジン
猩々 (右シヤウ〜)	シヤウ〜	シヤウ〜
錫杖 (右シヤクジヤウ)	×シヤクチヤウ	×シヤクヂヤウ
漿粉 (右シヤウフ)	シヤウフ	シヤウフ
将碁盤 (右シヤウギバン)	シヤウギバン	×シヤギノバン
浄衣 (右ジヤウエ)	シヤウエ	ジヤウエ
装束 (右シヤウゾク)	シヤウソク	シヤウゾク
生得 (右シヤウトク)	シヤウトク	シヤウトク
殊勝 (右シユシヤウ)	×シユセウ	×シユセウ
莊嚴 (右シヤウゴン)	シヤウゴン	シヤウゴン
唱明 (右シヤウミヤウ)	シヤウミヤウ	
生死 (右シヤウジ)	シヤウシ	シヤウジ
精進 (右シヤウジン)	シヤウジン	シヤウシ
周章 (右シウシヤウ)	シウシヤウ	シウシヤウ
尋常 (右ジンジヤウ)	ジンシヤウ	ジンジヤウ
消息 (右シヤウソク)	×シヨウソク	×シヨウソク
与證 (右シシヤウ)	×シシヨウ (支證)	×シセウ
諍論 (右シヤウロン)	シヤウロン	ジヤウロン
證據 (右シヤウコ)	×シヨウコ	×シヨウキヨ
商賣 (右シヤウバイ)	シヤウバイ	シヤウバイ
上裁 (右ジヤウサイ)	シヤウサイ	ジヤウサイ
相伴 (右シヤウバン)	シヤウバン	
生涯 (右シヤウガイ)	シヤウガイ	シヤウガイ
承引 (右シヤウイン)	×シヨウイン	×シヨウイン
上表 (右シヤウヒヤウ)	ジヤウヒヨウ	×シヤウヘウ
勝負 (右シヤウブ)	×シヨウブ	×シヨウブ
障碍 (右シヤウゲ)	シヤウゲ	シヤウゲ

[正宗文庫本せ部]

[大谷大学本せ部]

西浄 (右セイジャウ)	セイジャウ	セイジャウ
石菖 (右セキシヤウ)	セキシヤウ	セキシヤウ
誓状 (右セイジャウ)	セイジャウ	セイジャウ
勝負 (右シヤウブ)	×セウブ	×セウブ
		セウベンシヨ (小便所)
		セウシユン (小春)
		セウジ (承仕)
		セウナコン (少納言)
		セウキタイジン (鍾馗大臣)
		セウキヨ (證據)
		セウイン (承引)

『節用集』においては「伊勢本」系統本がまずあって次に「印度本」系統本がうまれたということは動かない。しかし、現在存在が確認されている「伊勢本」系統本テキストすべてが、現在存在が確認されている「印度本」系統本テキストに先立って書写されているわけではない。テキストの系統と書写年時は別のことがらとしてある。しかしまた、書写という言語活動によって、テキストが根本から変わるのではないと考えれば、テキストの系統を軸に、書写年時を必要に応じて考慮に加えていけばよいことになる。

そのように考えた場合、粗いまとめかたになることを承知でいえば、右の「状況」は「シヤウ」から「セウ」へということになる。また、「大谷大学本」も「小汀本」も、『落葉集』が表記上区別しようとしていた「開合」の表記がまちまちにみえる。こうした点にも『落葉集』と『節用集』との違いが窺われる。

### おわりに

本稿では仮名によって「音」をどのように文字化するか、という問いをたて、『落葉集』と古本『節用集』とを(対照的に)観察対象とした。『落葉集』においては、いわゆる「開合」の別を仮名の文字化のしかたによって区別しようとしていたと思われる。

拗長音〔ショー〕を例にすれば、開音は「字音仮名遣い」どおりに「イ段の仮名+やう」という形で文字化し、合音は「字音仮名遣い」でいえば

「セウ」「セフ」「シヨウ」三通りがあるが、これらを「エ段の仮名+う」という形で文字化している。「シヨウ」という発音を「セウ」と文字化することは、表音的とはいええない。土井忠生（1934）においては、「室町期に於ける発音に基づいてゐる」「当時の発音的仮名遣い」と述べているが、これらの「発音」は少なくとも「表音」ということにはならないことを指摘した。しかしまた、表音的かどうかは措くとしても、開音と合音とを文字化のしかたによって区別しようとしていたことはたしかで、それを「仮名使い」と呼ぶのであれば、一つの「仮名使い」とみることができる。むしろ発音を離れた「仮名使い」とみるのが妥当ではないか。

『節用集』においては、まずは「シヤウ」という文字化が多くみられ、次第に「セウ」という文字化が増えていっているように思われる。同じ見出しが「し部」と「せ部」とに双掲される場合も少なからずあり、これは「仮名使い」を人為的に統一するのではなく、「二つの仮名使い」を認め、それに対応するための「手当」にみえる。

『落葉集』の「落葉集」「色葉字集」は右振仮名を「検索キー」としている。『節用集』の右振仮名も「検索キー」ではあるが、『節用集』の見出しはあくまでも漢字列で、振仮名は『節用集』というテキストにとっては2次的なものといってよい。そして、『節用集』の書写においては、まず漢字列が写され、それに書写者が振仮名を施していったと思われる。そのために、振仮名には「揺れ」が少なからず看取され、その「揺れ」は当該語の発音に起因する場合が少なくない。振仮名と漢字列との関係でいえば、『落葉集』は案外と「発音」がかかわっていないと覚しい。それは『落葉集』が漢字活字の「総見本帳」であるためであろう。一方、『節用集』の振仮名の多くは、書写に際して書写者が施していたと推測される。そのために当該時期における当該語の「発音」が関与しやすい。

本稿では、『落葉集』と『節用集』とを対照することでそれぞれにおける「音」の文字化のしかたについて考察した。対照は有効な方法であったと考える。

## 註

- 1 『落葉集』のテキストとしては天理図書館善本叢書と書之部第76巻『落葉集二種』に影印として収められている。天理図書館蔵本を使用する。例の所在はこの天理図

書館蔵本によって示した。音・訓の検索には、小島幸枝編『耶蘇会版落葉集総索引』（1978年、笠間書院）を使用した。学恩に感謝する。「総索引」はイエズス会本部蔵本に基づいて編まれている。

- 2 鄭炫赫「『落葉集』の字音仮名遣い」（『早稲田日本語研究』14、2005年）は『落葉集』において「字音を仮名表記したもの」を観察対象として、「カ行・ガ行合拗音の表記にはほとんどゆれがないが、影母・于母・匣母の表記にはゆれが激しかった」と述べ、その理由については「『落葉集』編者が当時の仮名遣書のような文献を参考にして字音仮名遣いを行ったからであろうと考えられる」と述べる。当該論文は「落葉集」「色葉字集」「小玉篇」を一つのものとし、それを「韻尾」「カ行・ガ行合拗音」「拗長音」「声母」に分けて検討している。一定の「スケール」をあてた結果であるので、それを「事実」ということはできるであろうが、その「事実」について考察する必要がある。「おわりに」には「当時の仮名遣書のような文献を参考にした」という推測が示されているだけで、本稿とは『落葉集』が分析対象であることは等しいが、その『落葉集』をどのようなテキストととらえるかということ、テーマの設定、いずれにおいてもまったく異なる。
- 3 本稿では、語形を仮名書き語形と切り離して示す必要がある場合がある。議論を混乱させないための必要最低限の手当として、「リョウシン」のように片仮名書きしして一重鉤括弧に入れて現代仮名遣いによって「語形」を示す。「リョウシン」という語が「落葉集」では「りやうしん」と書かれている、というみかたを採る。また「発音」を話題にする必要がある場合は、[リョーシン]のように[ ]を使う。
- 4 当該時期において、[イ・ウ][ユ・ウ]のように「割った」発音がいかなる地域においても行なわれていなかったかどうかについては、判断材料を持たない。しかしまた『日葡辞書』の記述に基づいた判断が「見当違い」ということにはならないと考える。

